

はじめに

日常の居住生活を取りまく環境を住環境と呼ぼう。この住環境をめぐる都市計画上の調査研究が今日的な意味で盛んになったのは昭和50年代以降のことである。もちろんそれ以前からも先駆的な多くの研究が行われ、最近の活発な研究もそれらの延長上になされているわけではあるが、量と質において、最近のものの比重は大きい。

昭和30年代の研究は主としてニュータウンなど、新しい市街地の開発に際しての住環境を追求することに主眼がおかれた。確かに計画的な新市街地の住環境は向上したが、その一方で放置された既成市街地から郊外部にかけては、老朽密集、住工混在、木賃アパート街やスプロールエリアの形成など、いわゆる問題市街地の発生と拡大をみた。昭和40年代になってようやく、これら地域へも関心が向けられ、研究面、施策面で少しずつの実績が積み重ねられてきたのである。

本報告書は、これら近年の住環境研究の動向に着目し、その内容を分析したものである。あわせて研究上の今後の課題も考察したが、この部分はまだ問題の指摘程度で、読者の批判を得てさらに充実すべきといえる。このような作業を行い、刊行する意図は、研究の蓄積と評価、関係者間の共有によってのみ次の時代の研究発展が可能になると考えているからにほかならない。その意味で、潜越ないいかたを許してもらえば、本報告書が多くの、特に若手の研究者に読まれることを望んでいる。とりわけ今日は、規制緩和を基調とする再開発促進の論調が目立っており、営々として築いてきた住環境重視の思想がおし流されかねない危機をはらんでいる。望ましい環境の実現は都市計画の基本目標であって、時々の社会経済的背景の変化を組入れながらも確保していかなければならない。そのために本報告書が少しでも役にたてば幸いである。

執筆に際しては、問題意識や分析の仕方についての討論を経て、目次構成を定め、分担して作業した。討論は、関心を広め、また問題認識をより確実なものとするため、日本建築学会都市計画委員会・住環境小委員会が主催する公開シンポジウムを活用させていただいた。前後2回、あわせて約80名の参加が得られた。執筆には、赤崎弘平（大阪市立大学助手）、安藤元雄（近畿大学教授）の両氏にも専門とする部分を分担していただいた。このように本書は3人の著者のみでまとめたものではない。協力していただいた皆さんにお礼申し上げる。また最後となったが、研究調査の機会を提供して下さった(財)第一住宅建設協会の徳田敦司氏に厚く感謝申し上げたい。

昭和63年3月

高 見 沢 邦 郎（東京都立大学助教授）

佐 藤 滋（早稲田大学助教授）

高 見 沢 実（横浜国立大学助手）